

<論文>状態述語の経験者と統語構造

著者名(日)	外崎 淑子
雑誌名	言語科学研究 : 神田外語大学大学院紀要
巻	6
ページ	2013/01/160:00:00
発行年	2000-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00000343/

状態述語の経験者と統語構造*

日本学術振興会特別研究員

外崎淑子

Experiencer and Syntactic Structure of Stative Predicates in Japanese

JSPS Reseach Fellow

Sumiko Tonosaki

Many stative predicates in Japanese take an Experiencer and a Theme. This paper argues that such Japanese stative predicates can be classified into the following three types.

- (i) Potential predicates which have the Experiencer marked with *ni* and the Theme marked with *ga*.
- (ii) Tough adjectives and (nominal) adjectives which express the speaker's judgment, and which take a Theme argument obligatorily with or without an Experiencer marked with *nitotte*.
- (iii) (Nominal) adjectives which express desire, ability, likes, dislikes, and/or emotion, and which require both Experiencer and Theme arguments but do not allow the Experiencer to be marked with *nitotte*.

Predicates of types (i) and (iii) can be used in subject honorific expressions but those of type (ii) cannot. The binding data show that the Experiencer of every predicate of (i) (ii) and (iii) is structurally in a higher position than the Theme. This may indicate that the Experiencer of the predicates of (i) and (iii) is base-generated in the Specifier position of the IP, but not in the case of (ii). The fact that (nominal) adjectives in (iii) exhibit high transitivity may be naturally accounted for if we postulate that such adjectives have complex internal structures involving transitive predicates, following the spirit of Hale & Keyser (1997) (1998).

*経験者 状態述語 にとって

0. はじめに

本稿では、日本語の状態述語の経験者(Experiencer)について考察し、述語の種類

言語科学研究第6号(2000年)

によってその性質が異なることを明らかにする。そして、それらの経験者が統語上どの位置に現れるのか提案し、さらに、このような述語の違いが述語の内部構造に起因する可能性を示唆する。

1. 経験者の格

日本語の状態述語には、(1ab)のようにその経験者の項として「に」格を取ることが可能であるものと、(2ab)のように「に」格を取ることができないものがあると言われている。

- (1)a. 太郎{に/が}フランス語が{話せる/分かる}(こと)
- b. 太郎{に/が}この本が面白い(こと)
- (2)a. 僕{*に/が}新車が{買いたい/欲しい}(こと)
- b. 太郎{*に/が}りんごが{好きな/嫌いな}(こと)

しかしながら、どの状態述語が「に」格の経験者を持つかについては、従来、語の個別的特徴であると捉えられ(Kuno 1973, Takezawa 1987等)、話者による揺れも大きく、未だ一般化は得られていない。例えば以下Table-1はKuno (1973)による経験者「に」格の文法性の判断である。

Table-1 (Kuno 1973: 90-91まとめ)

	「に」格を許すもの	「に」格を許さないもの
動詞	Vれる(可能), (お金が)ある/ない ¹ , できる, 聞こえる, 見える, 分かる	(お金が)要る ¹
形容詞	有り難い, 面白い, 恐ろしい, 楽しい, つまらない	Vたい(願望), 恥ずかしい, 欲しい, 愛しい, かわいい, 口惜しい, まずい, 懐かしい, 妬ましい, 憎らしい, うまい, 羨ましい
形容動詞	必要, 可能, 困難, 苦手, 容易	下手, 嫌い, 好き, 得意, 残念, 上手

状態述語の経験者と統語構造

以上はKunoの文法性の判断だが、感情を表す形容詞に関しては、「に」格の可否は話者によって揺れが大きく、McCawley (1976: 944)は、Kunoが挙げている上記17個のすべての形容詞は、「に」格を許すとしている。一方、寺村 (1982: 146)は、ほぼ絶対に「に」とならないものとして「欲しい、好きだ、嫌いだ」などを、また「に」が許容される度合いが高いものとして「恐ろしい、恨めしい、嬉しい、喜ばしい、腹立たしい、気掛かりだ、心配だ、苦手だ、やり切れない、羨ましい」などを挙げているが、やはり、判断にかなりの個人差があることを記している。²

このような許容度の揺れが見られる一つの原因として、「に」格と交替可能な「にとって」の存在が考えられる。例えば、(3ab)に見るように、可能動詞の「に」格は「にとって」への交替を許さないが、³ 「有り難い、面白い」などの経験者は、(4ab)に見るように、「に」格の他に「にとって」の使用が可能である。

(3)a. 太郎にフランス語が話せる(こと)

b. *太郎にとってフランス語が話せる(こと)

(4)a. 太郎にこの映画が面白い(こと)

b. 太郎にとってこの映画が面白い(こと)

一方、「妬ましい、懐かしい」などの経験者は、(5ab)に見るように「に」格よりも「にとって」の方が許容度が高いようだ。

(5)a. ?*太郎に花子の出世が妬ましい(こと) /太郎には花子の出世が妬ましい。

b. ??太郎にとって花子の出世が妬ましい(こと) /太郎にとっては、……。

問題は、(5ab)の場合、「にとって」を話題化した「にとっては」が、「には」と同じくらいの許容度である点である。このことから、(5a)の「太郎には」は、「に」を話題化したものではなく、「にとっては」の異形態である可能性がある(三宅知宏先生による指摘)。つまり、「に」の許容度を「には」で考えることにより、ある程度の個人差がでるのではないかと予測される。

形容詞、形容動詞の経験者の「に」格の可否には以上のように話者による揺れがあるが、「に」格の可否は、概ね(6)のような一般化があると提案する。

言語科学研究第6号(2000年)

(6) 経験者と対象(Theme)の2項を必ず取る状態述語は、「に(にとって)」の経験者を許さない。一方、対象のみの1項を取る述語で経験者を任意に取りうる述語は、「に(にとって)」の経験者を許す。

(6)の一般化を(7)(8)の例で説明する。

- (7)a. この車(が/は)欲しい。 / 僕(*に)はこの車が欲しい。
 b. 料理(が/は)得意だ。 / 太郎(*に)は料理が得意だ。
 (8) この本(が/は)面白い。 / 太郎(に)はこの本が面白い。

(7a)の「欲しい」は、経験者が省略されて「この車が欲しい」となっているとしても、「私はこの車が欲しい」のように経験者である「話者」の解釈が義務的に生じる2項述語である。そして「*僕にはこの車が欲しい」が非文であるように、「に」格の経験者を許さない。(7b)の「得意だ」は、「料理が得意だ」のように経験者が省略されてしまうと、経験者が特定されずに不完全になってしまう2項述語である。そして、「*太郎には料理が得意だ」のように、「に」格経験者を許さない。つまり、「欲しい」や「得意だ」のように経験者と対象の2項を必ず取る述語は「に」格経験者を許さないということである。一方、(8)の「面白い」の場合は、「この本は面白い」のように経験者がなくても「この本」の属性を表す状態性意味として完全な文である。このように「面白い」は1項述語であり、この述語は「太郎にはこの本が面白い」のように「に」格経験者を許す。(8)を経験者が省略されている文と考える場合、その省略された経験者の解釈は「誰にとっても」という「任意の経験者」となる。⁴

本稿では経験者を持ちうる状態述語を、項数と、経験者が「に」または「にとつて」で表されるか否かによって、以下、I～IIIのように分類する。

状態述語の経験者と統語構造

Table-2 「述語タイプ別項数と格パターン」

分類	項数	経験者の格	述語の種類
I	2項	「に/*にとって」	可能・知覚述語：Vれる, できる, 分かる, 見える, 聞こえる
II	1項/(2項)	「に/にとって」	(i) 難易文：Vにくい, Vやすい ⁵ (ii) 判断の形容詞・形容動詞：面白い, 難しい, 良い, 便利だ, 易しい, 無理だ等
III	必ず2項	「*に/*にとって」 「?*に/??にとって」	(i) 願望の形容詞：Vたい, 欲しい (ii) 能力, 好き/嫌いの形容詞・形容動詞：好きだ, 嫌いだ, うまい, 得意だ, 上手だ等 (iii) 感情の形容詞：羨ましい, 妬ましい, 懐かしい, 嬉しい, 惜しい 等

Iグループには、経験者と対象(Theme)の2項を必ず取り、経験者の格として、「に」格を許容するが「にとって」を許さない述語を分類する。述語の種類としては、可能・知覚述語が挙げられる。IIグループには、対象の項を取る1項述語だが、任意に経験者を取って2項ともなりうる述語で、経験者の格として、「に」「にとって」を許容する述語を分類する。述語の種類としては、難易文と「面白い」「難しい」などの判断の形容詞・形容動詞が挙げられる。IIIグループには、経験者と対象の2項を必ず取り、経験者の格としては「に」「にとって」のどちらも許容しない述語を分類する。述語の種類としては、願望の形容詞の「Vたい」「欲しい」、能力・好き/嫌いの形容詞・形容動詞、また、「うらやましい、ねたましい」などの感情の形容詞が挙げられる。IIグループの述語は「に」と「にとって」のどちらも可能としたが、「に」と「にとって」では、「太郎にこの辞書が使いやすいこと」と、「太郎にとってこの辞書が使いやすいこと」の許容度を考えると、後者の「にとって」の方がより許容度が高いことから、「にとって」が基底形であ

言語科学研究第6号(2000年)

ると考えられる。「太郎にはこの辞書が使いやすい」のように「には」にすると完全に許容されるのは、やはり、この「には」が「にとっては」の異形態であるゆえと考えらる。ゆえに、純粹に「に」格の経験者を許す述語は可能動詞のみと考えられ、そのほかの述語で従来「に」格経験者を許すと分類されていたものの基底形は、すべて「にとって」と考えるのが妥当だと本稿では考える。

この節では、状態述語を項数と経験者の格によって、Table-2のI, II, IIIの3グループに分類したが、この分類は、他の統語的振る舞いにおいても妥当な分類であることを、2節で見ていく。

2. 束縛関係、主語尊敬語化

Table-2のI～IIIの分類による述語の経験者は、束縛関係においては共通の振る舞いを示すが、主語尊敬語化においては異なる振る舞いをするをこの節で観察する。

2.1 束縛関係

まず、経験者と対象の束縛関係について考察する。それぞれ、Iの述語例として可能動詞の「Vれる」を(9)に、IIの述語例として難易文の「使いやすい」と判断の形容動詞「便利だ」を(10)と(11)に、IIIの述語例として「好きだ」「うらやましい」を(12)と(13)に示す。

- I (9)a. 田中さん_i{に/が}自分_iの家までの地図が書ける。 経験者-対象(自分)
 b. *自分_iの父親{に/が}田中君_iが叱れる。 *経験者(自分)-対象
- II (10)a. 田中さん_i{に(とって)/が}自分_iの研究室が使いやすい。 経験者-対象(自分)
 b. *自分_iの指導教授{に(とって)/が}田中君_iが使いやすい *経験者(自分)-対象
- (11)a. 田中さん_i{に(とって)/が}自分_iのファイルが便利だ。 経験者-対象(自分)
 b. *自分_iの指導教授{に(とって)/が}田中君_iが便利だ。 *経験者(自分)-対象
- III (12)a. 田中さん_iが自分_iの研究室が好きだった。 経験者-対象(自分)
 b. *自分_iの学生が田中先生_iが好きだった。 *経験者(自分)-対象
- (13)a. 田中さん_iが自分_iの息子が羨ましかった。 経験者-対象(自分)
 b. *自分_iの息子が田中さん_iが羨ましかった。 *経験者(自分)-対象

状態述語の経験者と統語構造

I～IIIの述語すべてにおいて、経験者が「自分」の表現を含む対象の先行詞となる(a)の例は許容されるが、その逆、対象が「自分」の表現を含む経験者の先行詞となる(b)の例は非文である。またここでは例を挙げないが、「自分」の代わりに「彼自身」や「誰もが自分の研究室が好きだった」のような変項束縛 (variable binding)の例を使っても同じ結果が得られる。このことから、I～IIIの述語すべてにおいて、経験者は対象よりも構造上高い位置にあると言える。⁶

2.2 主語尊敬語化

次に、主語尊敬語化について観察する。補文に主語を持つ複合述語は、すべて補文の主語によって主語尊敬語化が可能なので、述語のどのグループが主語尊敬語化が可能かを見るためには、単独述語において、それが可能かを見る必要がある。以下、(14)は「分かる」「できる」を用いたIグループの単独述語の例、(15)は、「難しい」「面白い」を用いたIIグループの単独述語の例、(16)は、「好きだ」「欲しい」「懐かしい」を用いたIIIグループの単独述語の例である。

(14) 田中先生はフランス語が{お分かりになる/おできになる}。

(15) 田中先生はこの問題が{*難しくていらっしゃる/??面白くていらっしゃる}。

(16) 田中さんはこの車が{お好きだ/欲しくていらっしゃるらしい/懐かしくていらっしゃるらしい}。

(14)(16)は主語尊敬語化が可能であるが、(15)は主語尊敬語化ができない。(16)において、「お好きだ」に比べ「欲しくていらっしゃる」「懐かしくていらっしゃる」がやや不自然に感じるのは、「欲しい」「懐かしい」が話者指向性の形容詞であるのに、「田中さん」という第三者の主語を選んでいるためだと考えられる。しかしその不自然さを除けば、これらも主語尊敬語化が可能と考えられる。(14)(15)(16)より、IグループとIIIグループの述語の経験者には主語特性があるが、IIグループの述語の経験者には主語特性がないと言える。

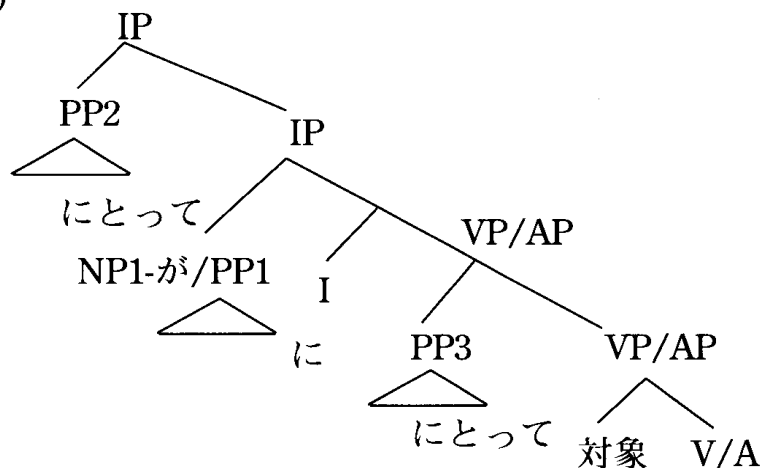
以上、1節と2節では、状態述語の経験者は、(i)その述語に義務的に要求される項か、(ii)「に」格を持ち得るか、(iii)その「に」格を「にとって」に置き換えが可能か、(iv)主語尊敬語化が可能かの4点において、I, II, IIIの3つのグループに分けられることを見てきた。⁷

言語科学研究第6号(2000年)

3. 経験者の統語上の位置

この節ではI～IIIの述語の経験者が、統語上どの位置にどのように現れるのかを考察する。2.1で見た経験者と対象の束縛関係によると、I～IIIすべての述語において、経験者は対象よりも構造上高い位置にあるはずである。その上で、「主語」特性がIPの指定部で与えられると仮定するならば、2.2より、Iの可能・知覚述語と、IIIの願望、能力、好き嫌い、感情の形容詞・形容動詞のグループの経験者は主語尊敬語化が可能で主語特性を持つゆえ、(17)の樹形図でいうと、NP1, PP1のようにIPの指定部に位置すると考えられる。⁸ 一方、IIグループの難易文、判断の形容詞・形容動詞のグループの経験者は、主語尊敬語化ができず主語特性を持たないゆえ、IP指定部以外の対象より上位のどこかに位置すると提案したい。⁹ IPに付加する形であればPP2に、他の付加詞と同様であれば、IP内部のPP3あたりに位置すると考えられる。

(17)



IIグループの経験者が主語特性を持つIPの指定部に位置しないとされるもう1つの根拠として、IIグループの述語の「が」格経験者の解釈が挙げられる。一般に、状態述語の「が」格主語は、独立文では「総記」の解釈を受けるが、埋め込み文では中立叙述の解釈を受ける。例えば形容詞(状態述語)「高い」の場合、独立文の「あのビルが高い」では、「が」格主語の「あのビル」は「総記」の解釈を受けるが、埋め込み文の「あのビルが高いこと」では、「あのビル」は中立叙述の解釈を

状態述語の経験者と統語構造

受ける。ここで、IIグループの「が」格経験者の解釈を考察しよう。「太郎がこの辞書が使いやすいこと」や「太郎がこの本が面白いらしい」のように、「Vやすい」「面白い」といったIIグループの述語の「が」格経験者は、埋め込み文においても、総記の解釈を受けてしまう。これは、IグループやIIIグループの「が」格経験者が埋め込み文において中立叙述の解釈を受けるのとは対照的である(例「太郎がフランス語が話せること」(Iグループ)、「太郎が言語学が好きなこと」(IIIグループ))。ゆえに、IIグループの述語の経験者が「が」格で現れる場合は、それは「にとって」を焦点化した「にとってが」であり、IIグループの述語の経験者は常に後置詞句であると本稿では考える。IIグループの経験者は、「に」「にとって」のどちらも可能だが、1節でも述べたように、「にとって」が基底形であると考えられる。

4. 述語の内部構造

この節ではIIIグループの述語についてさらに考察を深める。IIIグループの述語は他動詞同様他動性が高く、よく言われるように「が」格目的語の他に「を」格目的語も不完全ながら許す。

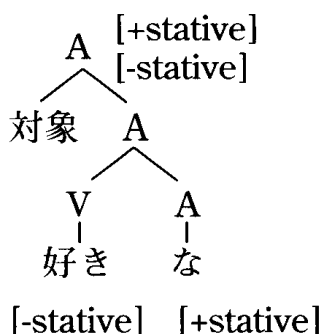
- (18)a. トマト{が/を}嫌いな人はたくさんいる。
 b. 新しいコンピュータ{が/?を}欲しいからといって、すぐに手を出すのはやめた方がいい。
 c. 花子の出世{が/??を}羨ましいなら、自分も努力しなさい。

寺村(1982:140)他が指摘しているように、述語の他動性は「非状態」か「状態」かの二者択一で表されるものではなく、動的なものから状态的なものへと連続するものである。IIIグループの述語の多くは他動詞を語内に持つ形容詞・形容動詞だが、これらは状态的でありながら動的に近い表現であると言える。なぜ語内に他動詞を持つとその他動性が統語にも影響を及ぼすのだろうか。このような述語が語彙部門で作られ「状態」述語として統語に登場するならば、「状態」性の性質しか持たないはずである。しかし「非状態」の性質をも不完全ながら示すということは、述語内部の動詞の性質[-stative]が、形容詞全体の他動性に影響しているためと考えられ

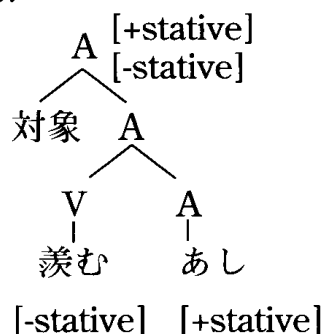
言語科学研究第6号(2000年)

る。Hale & Keyser (1997) (1998)が非能格動詞などの単独述語の複合的性質を、語彙部門、統語部門という枠を超えた形で捉えているのと平行して、本稿では日本語の形容詞においても、動詞を語内に持つ形容詞は(19ab)のような内部構造を持ち、その動詞の性質が統語に影響を及ぼしているとの考えを示唆したい。^{10 11}

(19) a.



b.



「好きな」は語彙範疇としては動詞ではなく形容詞であるので、語彙範疇の主要部としてはA(jective)が入るが、その主要部の[+stative]のみが述語全体の状態性(stativity)を決定しているのではなく、Aの補部に入っているVの[-stative]という性質も、述語全体の状態性に関わっていると言わなければ、この種の形容詞の動的な統語的振る舞いの説明がつかない。また「好きな」の内項である対象は、形容詞Aの項ではなく、形容詞の補部Vの項であると考えるのが妥当である。¹² 同じことが、「うらやましい」のようなシク活用形容詞にも言える。

5. 傍証：歴史的派生

(19ab)の構造の傍証として、形容詞の歴史的派生の研究が挙げられる。山崎(1963, 1974, 1992)、山本(1955)、川本(1977)、大野(1952)らは、ク活用形容詞とシク活用形容詞は形容詞が発生した当初からの区別であると分析している。山崎の研究では、形容詞の発生には以下3つの起源がある。まず「赤」に「し」がついて「赤し」などの、名詞に指定の助動詞「し」のついたもの。2番目に「お」に「あし」がついて「おいしい」などの、名詞に情意を表す接辞「あし」のついたもの。そして「うらやむ」に「あし」がついて「うらやましい」などの、動詞語幹に情意を表す接辞「あし」のついたものである。形容詞発生についての彼の研究をまとめる

状態述語の経験者と統語構造

と、Table-4のようになる。

Table-4

山崎 (1992)による形容詞発生の研究

- (i) 名詞(形状的体言)+si(指定の助動詞, 状態性接辞)=> 形容詞(ク活用)
あかい:赤+si => 赤し/よい:よ(善・能・好・嘉)+si => よし
- (ii) 名詞(形状的体言)+asi(情意を表す接辞)=>形容詞(シク活用)
おいしい:を(惜)+asi=>をし/ただしい:ただ(正)+asi=>ただし
- (iii) 動詞(語幹)+asi(情意を表す接辞)=>形容詞(シク活用)
うらやましい:うらやむ+asi=>うらやまし
いそがしい:いそぐ+asi=>いそがし
頼もしい(頼む), 悲しい(難ぬ), なつかしい(馴付く), くやしい(悔ゆ), 恋しい(恋ふ), 羨ましい(羨む), 妬ましい(妬む), 望ましい(望む), 誇らしい(誇る), 欲しい(欲る) 等

山崎分類の(iii)の派生の形容詞がすべて本稿の分類のIIIグループに入るのではないが、(iii)の派生の中で、現代語においても用いられている他動詞から派生した形容詞は、多く本稿のIIIグループに属す。また現代語でいわゆる形容動詞として用いられているものは、文語のナリ活用がダナ活用化したもので、その発生は「体言+助動詞」だが、「好きだ/嫌いだ」に関して言えば、この2つの形容動詞は動詞からの派生であると言える。

前節の(19ab)で、現代語のIIIグループの形容詞・形容動詞を、形容詞(A)を主要部とし、動詞(V)を補部とする構造に分解(decompose)する分析を提案したが、この単独述語の複合的構造は、現代語においては一見捉えにくくとも、歴史的派生を考えると、理にかなったものであると言えそうである。

6. まとめ

本稿では、日本語において、経験者と対象の2項を取りうる状態述語は、(i)2項を持ち経験者「に」格を取る可能・知覚述語、(ii)対象のみを取り、「にとって」で表される経験者を任意に取る難易文・判断の形容(動)詞、(iii)2項を必ず取り、経

言語科学研究第6号(2000年)

験者に「に/にとって」を許さない願望・能力・好き嫌い・感情の形容(動)詞、の3つに分類されることを、経験者の格パターン、必須項数、主語尊敬語化のデータから明らかにした。また、これらすべての述語は経験者の方が対象よりも構造上高い位置にあることを束縛関係のデータから示し、おのおのの経験者が統語上どの位置にどのように現れるのか、(17)の樹形図にその可能性を示した。さらに、IIIグループの形容(動)詞が対象の格付与に関して他動詞的な振る舞いをするという事実は、(19ab)のような他動詞を補部に持つ構造を仮定することによって説明が可能であるとの提案を行った。

注

* 本稿は第4回Morphology and Lexicon Forum (1998年8月26日 於津田ホール)において口頭発表した「状態述語の格パターン」と、『日本言語学会第118回大会』(1999年6月20日 於東京都立大学)において口頭発表した「日本語における状態述語の経験者」を改訂したものである。本稿に繋がる一連の草稿には、長谷川信子先生、井上和子先生、岩本遠億先生、桑原和生先生、村木正武先生、また、杉岡洋子先生をはじめとするLexicon Study Circleのメンバーの皆様によくのコメントや示唆を戴いたことを感謝します。

¹ ここではKuno (1973)の文法性の判断をまとめたが、三上章(1960)は、「太郎に(は)お金がある」のように、「要る」に「に」格を認めている(井上和子先生による指摘)。ともあれ「ある/ない」「要る」に関しては存在の「ある/いる」との関連の議論が必要なため、本稿では議論から外し、今後の課題とする。

² 「に」格主語についての記述的研究としては、他に、主語の「が/に」交替について、McGloin (1980)がその意味の違いを考察している。また、Sadakane & Koizumi (1995)は、日本語の「NP+に」には31通りの用法があり、それらは「数量詞移動」「分裂文」のテストにより4つのグループに分けられるとし、状態述語の「に」格主語はその分類からすると、使役構文の基底主語「健太は江美に舞台の上で踊らせた」と同じグループであるとまとめている。また、Inoue (1997)は、従来生成文法の枠組みで日本語について行われてきた核付与の分析を再考し、「に」の分布を説明するためには、内在格の「に」は別としても、いわゆる構造格の可能性のある「に」も統語部門ではなく形態部門(Morphology)で付与されるべきと主張している。Inoueは、「に」の性質を明らかにするために、受け身形や使役形の「に」を含め意味役割付与や格付与のメカニズムについて検討しているが、今回本稿ではそういった議論には立ち入らず、それらの解明は今後の課題とする。

³ Kuroda (1987)は、「Vれる」文を可能文タイプと難易文タイプの2タイプに分けており、難易文タイプの「Vれる」文は、経験者の「に」が「にとって」に置き換え可能であるとし、「今年はアメリカ人にとってはヨーロッパが安く行ける」等の例をあげている。しかし

状態述語の経験者と統語構造

本稿では「Vれる」文は可能文タイプのみを扱うこととする。

⁴ 時枝 (1936)は、日本語の形容詞には対象の属性を表す状態性意味と主観者の気持ちを表す情意性意味の二面があり、「面白い」のように両方の意味を持つ形容詞と、「赤い」のように状態性意味のみを有する形容詞があると論じている。ここで時枝の分類を採用すれば「欲しい」などの形容詞は情意性意味のみを持つ形容詞ということになる。

⁵ Inoue (1978)はいわゆる日本語の「難易文」と呼ばれている「Vにくい/やすい」には4つのタイプがあると分析している。Kuroda (1987)は、その中で、InoueがIのタイプに分類しているものが、英語のtough sentenceと平行的であるとし、このタイプは経験者の項「にとって」を持つと議論している。本稿で「難易文」として扱うものは、Kuroda (1987)同様、Inoueの分類でいうタイプIのものである。

⁶ 日本語の場合、「自分」の先行詞は主語でなければならないとの一般化があるが、(10a)(11a)では、「田中さん_iにとって自分_jの・・・」のように、「NPにとって」も「自分」を束縛できる。この事実から、「NPにとって」を統語構造上主語位置にあるとすると、次節2.2で述べる、「NPにとって」が主語尊敬語化できず、主語位置にあるとは考えられないという事実と矛盾してしまう。本稿では「自分」束縛を経験者と対象の構造上の高さ関係を調べる道具としてのみ用いた。

⁷ I, II, IIIの述語グループの振る舞いの違いとして、もう一つ、数量詞の作用域関係が挙げられる。Iグループの「できる」は、経験者の格に関係なく(「が」であっても「に」であっても)、作用域は、対象が広い方がやや不自然であり、IIグループの難易文は、経験者が広い解釈と対象の広い解釈の両方が可能であり、そして、IIIグループの「欲しい」は、経験者の方が広い解釈しかない。

- (I) [太郎か花子]_i{に/が}大半の問題ができる(だろう)[太か花]_j>大半; ?大半 > [太か花]
 (II) [太郎か花子]_i{に/が}大半の辞書が使いやすい [太か花]_j>大半; 大半 > [太か花]
 (III) [太郎か花子]_iが 大半の賞が欲しい(だろう) [太か花]_j>大半; *大半 > [太か花]

この事実からも、Iの可能・知覚述語の「に」格経験者とIIの難易文の「に」格経験を同一に扱うことができないと言える。そしてこの事実は、これら3つの述語グループは、単に経験者と対象の2つの意味役割を持つ状態述語として一括りにされるのではなく、おのおの区別されなければならないとの本稿の議論の証拠となる。

しかし、この作用域関係の事実がどのような統語現象に依存しているのか現段階では説明がつかなかったため、本文の議論からははずし、データの事実としてのみここに記した。

⁸ Iの可能動詞の「に」格経験者PPに関しては、IP指定部のゼロ主語と同一指示であるPPがIPに付加する分析(Saito 1982)もあるが、ここではPPが直接IP指定部に現れるとの分析(Takezawa 1987, Ura 1996)を採用しておく。

⁹ 同じく杉本(1986)は、「『に』が『にとって』と交替しうるということは、『に』でマークされている時でもその名詞句の主語性が低いということも考えられる。」(p. 333)と述

言語科学研究第6号(2000年)

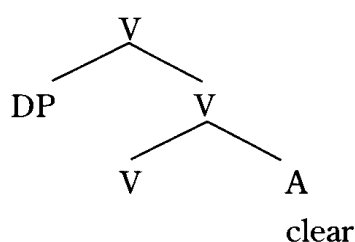
べ、「にとって」に交替しうる経験者と交替できない経験者とではその主語性が異なる可能性を示唆している。彼の「『にとって』に交替しうる経験者の主語性は低い」という直感が正しいことは本稿の主語尊敬語化のデータからも明らかで、ゆえに本稿では、「にとって」に交替可能な経験者の項をIPの指定部に置かない分析を提案している。

¹⁰ Sugioka (1984)は述語が「に」格主語を許すか否かをその語の派生と関連して捉えている。Sugiokaは述語を語彙部門内で生成させているが、しかし、述語の語根に他動詞を持ち、そこに状態性の接辞が付いた述語は「に」格主語を許さないとの直感は、本稿が目指す分析と一致する。

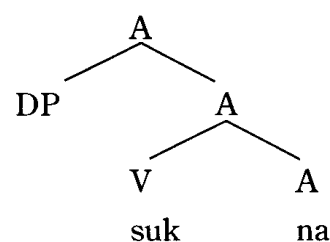
¹¹ Nishiyama (1998)は、日本語のいわゆる形容詞と形容動詞は、ともに「形容詞」であり、統語的、語彙範疇的には同じであり、形態的素性がDistributed Morphology的に言えば異なると分析している。本稿ではNishiyamaの分析に従って形容詞と形容動詞とは統語的に区別しないこととする。Nishiyamaは「静かだ」「高い」のように対象のみを持つ形容(動)詞を分析の対象としているため形容(動)詞内部に複合構造は持たせていないが、その分析対象を本稿のような経験者・対象の2項を持ちうる形容(動)詞にまで広げた場合にどのような説明が可能となるか今後研究を進めたいと考えている。

¹² Hale & Keyser (1998)は、英語の*clear*, *narrow*, *red*などの、形容詞が動詞化した脱形容詞動詞(*deadjectival verb*)は(i)のような構造を持つとしている。(i)は、動詞(V)を語彙範疇の投射のための主要部とし、その補部に形容詞(A)を持つ構造であるが、指定部にあるDPは、Aの項であると彼らは仮定している。本稿で扱っている日本語の動詞派生形の形容詞(*suk*(V)+*na*(A)など)は、ちょうど英語の脱形容詞動詞の、VとAの立場を逆にしたものと考えられるのではないか。

(i) 英語の脱形容詞動詞



(ii) 日本語の動詞派生の形容詞



日本語の場合は、形容詞(A)を語彙範疇の投射のための主要部とし、その補部に動詞(V)を持つ構造であるが、指定部にあるDPは、Vの項である。英語は主要部前置言語で日本語は主要部後置言語のため、主要部と補部の位置が逆で、(i)と(ii)は一見平行に見えないが、語彙範疇の投射のための主要部ではなく、その補部の項が指定部に現れるという点で、英語と日本語は平行的に捉えられる。

状態述語の経験者と統語構造

参考文献

- Hale, Ken and Samuel Jay Keyser. 1997. On the complex nature of simple predicators. In *Complex Predicates*, ed. Alex Alsina, Joan Bresnan, and Petter Sells, 29-65. Stanford, Calif.: CSLI Publications.
- Hale, Ken and Samuel Jay Keyser. 1998. On the syntactic projection of predicate argument structure. Ms., MIT.
- Inoue, Kazuko. 1978. 'Tough sentences' in Japanese. In *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, ed. Hinds, John and Irwin Howard, 122-154. Kaitakusha.
- Inoue, kazuko. 1997. Reanalysis of the Japanese case particle *ni*. In *Studies in English Linguistics, A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of His Eighties Birthday*, ed. Ukaji, Masaaki et al., 968-985. Taishukan.
- 川本崇雄 1977 「日本語の形容詞活用の起源 -特に南島語と対比して-」 『国語と国文学』昭和52年8月号, 41-57
- Kuno, Susumu. 1973. *The Structure of the Japanese language*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Kuroda, S.-Y. 1987. Movement of noun phrases in Japanese. In *Issues in Japanese Linguistics*, ed. Imai, Takashi and Mamoru Saito, 229-271. Dordrecht: Foris Publications.
- McCawley, Noriko Akatsuka. 1976. Review article: *The structure of the Japanese language*, by Susumu Kuno, Cambridge, Mass.; MIT Press, 1973. *Language* 52: 942-960.
- McGloin, Naomi Hanaoka. 1980. *Ga/ni* conversion re-examined. *Papers in Japanese Linguistics* 7: 65-77.
- 三上章 1960 『象は鼻が長い』 くろしお出版
- Nishiyama, Kunio. 1998. The morphosyntax and morphophonology of Japanese predicates. Doctoral dissertation, Cornell University.
- 大野晋 1952 「日本語の動詞の活用形の起源について」 『国語と国文学』昭和28年6月号, 47-56
- Saito, Mamoru. 1982. Case marking in Japanese: A preliminary study. Ms., MIT.
- Sadakane, Kumi and Masatoshi Koizumi. 1995. On the nature of the "dative" *ni* in Japanese. *Linguistics* 33: 5-33.
- 杉本武 1986 『いわゆる日本語助詞の研究』 奥津敬一郎, 沼田善子, 杉本武著 凡人社
- Sugioka, Yoko. 1984. Interaction of derivational morphology and syntax in Japanese and English. Doctoral dissertation, University of Chicago.
- Takezawa, Koichi. 1987. A configurational approach to case-marking in Japanese. Doctoral dissertation, the University of Washington.
- 寺村秀夫 1982 『日本語のシンタクスと意味I』 くろしお出版
- 時枝誠記 1936 「語の意味の体系的組織は可能であるか」 京城帝国大学文学会論纂第2輯 『日本文学研究』 137-205
- Ura, Hiroyuki. 1996. Multiple feature-checking: a theory of grammatical function splitting. Doctoral

言語科学研究第6号(2000年)

dissertation, MIT.

- 山崎馨 1963 「日本語の形容詞の起源について -万葉集を中心とした考察-」 『美夫君志』
6: 7-19
- 山崎馨 1974 「日本語の形容詞の起源について -補修篇 その一-」 『美夫君志』 17: 46-59
- 山崎馨 1992 『形容詞助動詞の研究』 和泉書院
- 山本俊英 1955 「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」 『国語学』 23: 71-75